



わたしとことば

一期一会

作家 阿刀田 高
あとうだ たかし

ずいぶん昔から「好きな言葉を」と求められると“一期一会”を挙げるが多かった。当時は知名度が低く、

「どう読むんですか? どういう意味ですか」

と聞かれることもあったが、昨今は、なにしろ響きがよく意味内容も潔いから、ところどころで繁く用いられるようになった、と、そんな気がしないでもない。

——少し手垢がついたかな——

と鼻白んだりすることもある。

本来は茶道の言葉だった。千利休の高弟・山上宗二の言で“今日の茶会を一生にただ一度の出会いと心得て、心を尽し、最善をまつとうするよう努める”と、これは昔、辞書で調べた。現実には、同じ仲間と茶席をともにすることは、よくある。だからと言って、

——今日は、まあ、このくらいでいいか。次にもっとサービスをすればな——

これは絶対にいかんということだ。

人との出会いは人生そのものと言ってよい。ゆるんだ気持ではなく、その場その場の一瞬を大切にしていきたい、と、あははは、この言葉をいつくしみ、

——そうありたい——

と願ってはいるけれど、私自身、実践しているとは、とても言えない。理想である、夢である。あらまほしい姿と告白すべきだろう。

ただ、七十余年を生きて来て、男女関係には、そこはかとなく一期一会、そんな気配の漂うケースが、ありましたね。

男同士はまた会うことも充分に考えられるけれど、女性については、

——あの日、あのとき——

思いを残しながら結果として一生会えなくなった関係、そういう情況、これは確かにありますね。小説や映画やドラマに、このテーマはうじゃうじゃ実在している。茶道ばかりではなく、恋愛道においても、

——今日を限りと思って頑張ろう——

役立つ言葉ではあるまいか。



阿刀田 高

1935年東京生まれ。早稲田大学仏文科卒業。国立国会図書館に司書として勤務する一方で執筆活動を続け、1978年「冷蔵庫より愛をこめて」でデビュー、1979年「来訪者」で日本推理作家協会賞、短編集「ナポレオン狂」で直木賞、1995年「新トロイア物語」で吉川英治文学賞を受賞する。現在、日本ペンクラブ会長。